DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.18

大東文化歴史資料館だより

第18号　2015. 5 . 31

大東文化学院時代の教員とその著述（二）
－道教研究の草分け 小柳司氣太－

歴史資料館運営委員・中国学科准教授　吉田　篤志

今ではほとんど使用しなくなった『詳解漢和大字典』が手もとにある。表紙には「新訂 詳解漢和大字典　文學博士 服部宇之吉／小柳司氣太 共著　冨山房」とあり、奥付の出版年を見ると「大正５年（1916）12月初版／大正15年４月398版／昭和２年１月改訂増補版／昭和10年４月371版／昭和11年１月新訂版／昭和11年２月50版」とあるから、手もとのものは昭和11年版であり、当時の定価は「参圓八拾錢」であった。大正15年（1926）の「新訂増補に就きて」という序に、

> 惟〔おも〕ふに、漢字の我が國に用ゐらるるや既に久し。名は漢字といふも、其の實は國字と擇〔えら〕ぶことなし。世人或は之が廢止を主張すと雖も、之を實際の狀態に徵すれば、漢語の創製は文明の進歩發展と與〔とも〕に日に増し月に加はりて、殆ど其の底止する所を知らず。……若〔も〕し今日、邦人にして漢字・漢語を除外せんか、一片の辭令と雖も完全に之を發表すること能はざるべし。……（〔　〕内の読みは筆者）

とあり、当時漢字漢語廃止論が喧伝されていたことが分かる。明治の文明開化、政府の欧化政策の影響を受け、さらには大正デモクラシーの雰囲気の中、漢字は日本語習得を阻害するから節減すべしとして、文部省は大正８年（1919）に「漢字整理案」を発表し、尋常小学校の教科書にある漢字2600余字の字画の簡易化等を示し、臨時国語調査会は大正12年（1923）に漢字1962字の標準漢字表（常用漢字表）を発表した。

この漢字漢語に対するネガティブな考え方や無批判な欧化政策の行き過ぎに対する批判・反省という気運が興り、日本文化を培ってきた漢字漢語、延いては漢学・儒学を再度見直そうという観点に立って創設されたのが大東文化学院である。大正10年（1921）に「漢学振興ニ関スル建議案」を衆議院に提出し、漢学者養成機関の創設を目指していた。大正12年には大東文化学院の設立認可を得ていたが、関東大震災（大正12年９月１日）の影響により開校が遅れ、翌大正13年（1924）１月11日の始業式に平沼騏一郎が訓辞を述べ、１月28日に一期生（本科生・高等科生）による開校式が行われ、２月11日に開院式が挙行された。

小柳は大正15年（1926）に大東文化学院の教授となり、昭和13年（1938）に大東文化学

院教頭（昭和15年に学長と改称）に就任、高等科部長を兼務するが、昭和15年（1940）７月18日に逝去した。小柳は山口高等学校を皮切りに、学習院大学・東京帝国大学・駒沢大学・国学院大学・慶応義塾大学等も歴任・兼務し、後に大東文化学院総長となった藤塚鄰は東京帝国大学の教え子である。また大正10年（1921）に「朱子の哲学」で学位を授与され（東京帝国大学、文学博士）、同年、学習院大学から一年間の中国出張を命ぜられ、趙爾孫・柯劭忞・王樹枏等、当時の総統徐世昌が組織した四存学会のメンバーと交流した。ちょうど藤塚も文部省から留学を命ぜられ、小柳と行動を共にしている（『東洋思想の研究』〔重刊本〕藤塚跋に拠る）。

小柳は明治３年（1870）11月３日に新潟県三条市上保内村に生まれる。少年期に近隣の私塾長善館（燕市）で鈴木惕軒（父は長善館創設者鈴木文台、子に中国文学者の京都帝大教授鈴木虎雄〔豹軒〕がいる）に漢文を習い、明治27年（1894）25歳の時に『宋学概論』を著し、その後、東京帝国大学支那哲学科で島田重礼（号は篁村、長男は漢文学者島田鈞一、三男は書誌学者島田翰、次女は安井小太郎に、三女は服部宇之吉に嫁ぐ）・竹添光鴻（通称進一郎、号は井井、『左氏会箋』により学士院賞受賞、次女は講道館創始者嘉納治五郎に嫁ぐ）・重野安繹（号は成斎、漢文の訓読を廃し、音読を主張。また清国洋務派の王韜と交流し、興亜会に参加）・星野恒（号は豊城、国史学を担当し、『国史纂要』を著す）等に教えを受ける。明治34年（1901）に『普通道徳新論』を著し、明治38年に東京帝国大学講師となり、漢学会に於いて「漢宋両学縦談」を発表し、星野恒が激賞。大正９年（1920）～12年に漢文大系（冨山房）の『墨子間詁』・『管子纂詁』・『晏子春秋』を、国訳漢文大成（国民文庫刊行会）の『商子』・『公孫龍子』を注釈し、また『道教概論』（世界文庫刊行会、大正12）を著す。

大東文化学院で教鞭を執る傍ら、『老荘哲学』（甲子社書房、昭和３年〔1928〕）・『老子新釈〔昭和漢文叢書〕』（弘道館、昭和４年〔1929〕）・『東洋思想の研究』正続（関書院、昭和９～13〔1934～38〕、森北書店から昭和17年〔1942〕に重刊）・『老子講話』（章華社、昭和９年〔1934〕）・『白雲観志附東嶽廟志』（東方文化学院東京研究所、昭和９年）・『道教の一班〔日本宗教講座〕』（東方書院、昭和10年〔1935〕）・『老荘の思想と道教』（関書院、昭和10年）等を著す。

小柳の著作は老荘思想や道教関係が多く、当時、儒教経典の経書を研究することが主流であった中、反儒教思想とも言える老荘思想や道教の研究に力を注いだことは注目すべきことであり、特に道教研究に於いては日本の草分け的存在と言えよう。藤塚は『東洋思想の研究』（重刊本）の跋に「先生にお伴して北京郊外の白雲観に赴いたのは寒い冬の日でありました。……先生は痛く此の白雲観なるものにひきつけられ、何とかして研究して見たいものだと歎ぜられました。竟に後年其の宿望を果たされ、親しく同観に道士的御修行をなさつた。其の効果が、名著「白雲観志附東嶽廟志」（昭和九年）となつて現はれました」と、エピソードを述べている。

大東アーカイブス 第18回 企画展

受贈資料展（２）　－大東史を伝えるものたち－

展示期間：平成27年５月21日㈭～９月30日㈬
（開室時間　毎週月～金曜日　９：00～17：00）
展示場所：大東文化歴史資料館　展示室（板橋校舎２号館１階）

第18回企画展「受贈資料展（２）　－大東史を伝えるものたち－」を開催いたします。

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、同窓生や退職者を含む教職員、また創設関係者のご家族の方々など、多方面に及ぶ関係各位からのご厚意で、多くの貴重な資料を受贈してまいりました。1923（大正12）年に大東文化学院が創設されて以降、90年余りの本学の歴史を伝える多種多様な寄贈資料は、これまでに数百点余りに及んでいます。それらの資料は大切に保管するとともに、これまでに開催した企画展でもテーマに沿って一部ずつ紹介してまいりました。

その一方で、アーカイブスがどのようなものを必要としているのかわからない、こんなものが資料になるだろうか、といった問い合わせを沢山いただいているのも事実です。そこで、これまで受贈した資料を改めて公開し、紹介することにいたしました。

なお、展示室の構造やスペース、資料の形態等の関係上、残念ながらこれまでの受贈品すべてを展示公開することは叶わず、一部ずつの公開となりますことをご了承ください。資料は順次入れ替えを行いながら公開していく予定です。

今回の展示で公開しているものには、次のようなものがあります。

＊卒業アルバム：昭和16年度の卒業アルバムの表紙には「２６０１」と記されており、前年に行われた「紀元二千六百年記念行事」を受けたもの。

＊入学案内：毎年発行される入学案内（大学案内）だが、現用を終えた段階で廃棄される傾向が強く学内の所蔵数は少ない。近年では退職教職員からの寄贈が増えてきており、今企画展では1964～68年の入学案内と、1971年の大学案内を公開した。昭和40年前後の60年代から70年代へかけては、付設校も増え、本学が拡大成長していった転機にあたる。1961（昭和36）年に板橋校舎へ移転、1967（昭和42）年度からは東松山校舎が加わった。

＊卒業証明書：1963（昭和38）年４月から1967

（昭和42）年３月に在籍した同窓生からの寄贈品を公開。在学中の学生証や定期なども保管されており、今となっては学生生活を窺える貴重な資料である。

＊体育祭・大東祭：第一回東松山フォークダンス大会開催時に配布された手ぬぐいや、大東祭パンフレットなど。昭和40年代に在籍した同窓生からの寄贈品。

＊『東京文政大学　図書目録』：板橋図書課からの移管品。新制大学へ移行した直後の一時期、大東文化大学は「東京文政大学」の名称だった。戦後の図書状況も窺える貴重な資料。

＊大東文化学院学生のノート：大東文化学院19期生の残した授業ノート。そもそも大東文化学院時代の学生による記録や授業ノートは希少であり、学院レベルの高さを知る貴重な資料である。前身校である大東文化学院での講義や学びがどういったものであったのか、学生による授業ノートが寄贈されたことにより、具体的な内容を知ることができる。

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）は、「学園及び大学を始めとする設置校の歴史に関する調査及び研究並びに校史に係る資料の収集、整理、保存及び公開を行い、もって学園及び設置校の発展に資することを目的」としています。これからも皆様のご支援ご協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

（歴史資料館運営委員　浅沼薫奈）

大東における「自校史教育」の取り組みと課題

大東文化大学では、いわゆる「自校史教育」の取り組みを2006年度から展開してきており、現在に至るまでその科目名を「自己・人間を見つめる　現代の大学」としている。大東アーカイブスの立ち上げとともに始まった同講義は、アーカイブス活動の成果を生かしつつ、大東文化大学及び日本の大学の歴史と現状とを知ることを目的に、講義構成や内容の更新など試行錯誤を重ねながら、今年で９年目の開講となった。当初は30～40名程度だった受講生数も、土曜開講から平日開講へと変更したこともあり、本年度の受講数はおよそ160名まで増加した。複数講師陣によるオムニバス形式の講義から現在は単独教員による講義へと変更、授業の内容は2013年に刊行した90周年ブックレット『大東文化大学の歩んできた道』を基本テキストとして使用したものとなっている。ただし、大東文化大学史を通史的に辿るだけでは意味がない。授業の意図としては、大学改革を迫られている現在の大学問題を念頭に置き、大学の変遷と社会の関わりを知り、現代社会の中における大東文化大学の位置や意味を問うことにある。

創立90周年を機に簡便な「通史」テキストの刊行が実現し、自校史教育の連続性や安定性は大いに増した。また、受講学生からは、授業を通じなければ考えなかったかもしれない自分の所属する大学の特性は何かを問うことが出来た、就職活動において出身大学が「何者」であるかを知ったことが強みになった等の感想が寄せられている。今後はともすれば閉鎖的になりがちな大学資料をより多く公開利用し、百周年を迎える大東文化大学史と現状をより多くの学生に知ってもらうべく工夫を重ねていかねばならない。

（歴史資料館運営委員　浅沼薫奈）

＜資料寄贈ご協力のお願い＞

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関誌・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、ご連絡ください。

毎年、同窓生の方々から各種関係資料のご提供をいただいております。在学中の刊行誌、写真、体育祭・学園祭のパンフレットや記録など、とても貴重な資料です。アーカイブスでは同時に、関係者からの聞き取り調査も積極的に行っていきたいと考えています。ご協力をよろしくお願いいたします。

【大東アーカイブス活動記録】（2014年10月～2015年３月）

10．8　全国大学史資料協議会全国大会参加
（於：桃山学院・大阪大学、～10日）
10．9　兵頭徹元教授蔵書類の一部受入確認
11.12　総務課より資料移管（1990年駅伝三冠達成記念枡）
12．4　全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：東京都公文書館）
12.12　第17回企画展「中国語大辞典編纂と創立60周年記念事業」公開
12.17　ニューズレター「大東文化歴史資料館だより」Vol.17配布
１．5　木村榮氏（同窓生）より資料受贈
１．7　河田泰弘氏より資料受贈
１.22　全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加
（於：神奈川大学）
１.30　ブックレット増刷業者打合せ
２．2　木村榮氏（同窓生）より資料受贈
２．2　鈴木一道氏（経営学科元教授）より資料受贈
２．5　平川克徳氏（同窓生）より資料受贈
２．9　河田泰弘氏より資料受贈
２．9　南山大学、アーカイブス調査のため来館
２.27　中村登氏（同窓生）より資料受贈
３．5　篠田貞子氏（同窓生）資料寄贈のため来館、資料受贈
３.12　歴史資料館運営委員会会議
３.19　全国大学史資料協議会幹事会・研究会参加
（於：武蔵野美術大学）
３.23　ブックレット第二刷納品

大東文化歴史資料館だより
第18号
DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.18

発　　行：2015年５月31日
編集発行：大東文化歴史資料館
〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10
大東文化大学徳丸研究棟
TEL 03（5399）7646 / FAX 03（5399）7647
URL：http://www.daito.ac.jp/information/about/archives/index.html